

未婚男女の結婚観

——第10回出生動向基本調査（独身者調査）の結果から——

中野英子・渡邊吉利

はじめに

厚生省人口問題研究所が5年毎に全国標本で実施している出生動向基本調査（旧称出産力調査）は、第8回調査（1982年）から、それまでの夫婦調査（50歳未満の妻を対象とする）に独身者調査を加えた2本建てで実施されている。調査が2本建てになったのは、未婚率の上昇傾向が続き、これが出生率低下の大きな要因になっていることから、結婚行動そのものの分析が必要とされるようになったためである。

すでに3回にわたって実施された独身者調査の結果から、未婚男女の結婚志向（いずれ結婚するつもり）はそれほど弱まってはいないことが確かめられているが、しかし、結婚志向がなかなか結婚に結びつかないという側面があることもまた明らかになっている。そこで本稿では、第10回出生動向基本調査・独身者調査（1992年実施）によって、未婚男女がどんな結婚のしかたを希望しているか、自らのライフコースにどんなイメージをもっているか、将来の親との同・別居をどう考えているかなどを手がかりとして、彼らの結婚観を探ってみたい。なお、この5年間の変化をみるために、必要に応じて第9回調査（1987年実施）の結果とを比較する。

本稿の分析対象は、いずれ結婚する意思のある18歳以上35歳未満の未婚の男性（3,795人）および女性（3,291人）である¹⁾。

I 希望する結婚形態

1. 希望する結婚形態と結婚年齢

未婚男女の恋愛結婚志向は非常に強いが、恋愛結婚志向はまず何よりも年齢に依存する。試みに図1は恋愛結婚の希望者割合を年齢別に示したものであるが、一瞥すれば明らかなように、年齢によってその割合は大きく異なる。

第10回出生動向基本調査の結果では、男女とも20歳代前半では70%台半ばから70%前後の水準であり、20歳代後半では60%台から40%台まで急激に減少し、30歳代前半では40%から30%台へとさらに減少している。恋愛結婚希望者が半数を割るのは、女性では28歳代、男性では29歳代となっている。男女別による恋愛結婚希望割合は、おおむね男性より女性の方が2~3ポイント多くなっている。ただし、未婚者の年齢構成は女性の方が若いから、全体で見ると女性の方が6ポイントほど恋愛結婚

1) 独身者調査の結果については次を参照のこと。厚生省人口問題研究所、(阿藤誠・高橋重郷・中野英子・渡邊吉利・小島宏・金子隆一・三田房美),『平成4年 第10回出生動向基本調査(結婚と出産に関する全国調査)第II報告書 独身青年層の結婚観と子供観』,調査研究報告資料第8号,1994年3月。同「独身青年層の結婚観と子供観—第10回出生動向基本調査(独身者調査)の結果から—」,『人口問題研究』第50巻第1号,1994年4月,pp.29-49。金子隆一,「未婚人口における結婚の需給要因の動向—第10回出生動向基本調査(独身者調査)の結果から—」,『人口問題研究』第50巻第2号,pp.1-24,1994年7月。

希望が多くなっており、恋愛結婚への執着は、年齢の若い女性層により強く浸透しているとみられる。

また、恋愛結婚希望割合はこの5年間に大きく増加し、女性の20歳前後と30歳代で上昇幅が若干小さいほかは、各年齢とも5年間に10ポイントないしそれを超える増加がみられる。

ここで、いくつかの指標と恋愛結婚希望割合との関連を検討するが、既に述べたように、希望する結婚形態は未婚者の年齢によって大きく変化している。したがって、ここでは年齢構成

を標準化した指標によって希望結婚形態の変化を観察する。標準化の方法としては、ある程度細分化した年齢区別に希望結婚形態の割合を計算し、その平均値を計算した。年齢区分は、18-22歳、23-24歳、25-26歳、27-29歳、30-35歳の5区分であり、各年齢区分の中ではある程度、若者の結婚に対する行動様式が均等であろうと思われる区分とした²⁾。

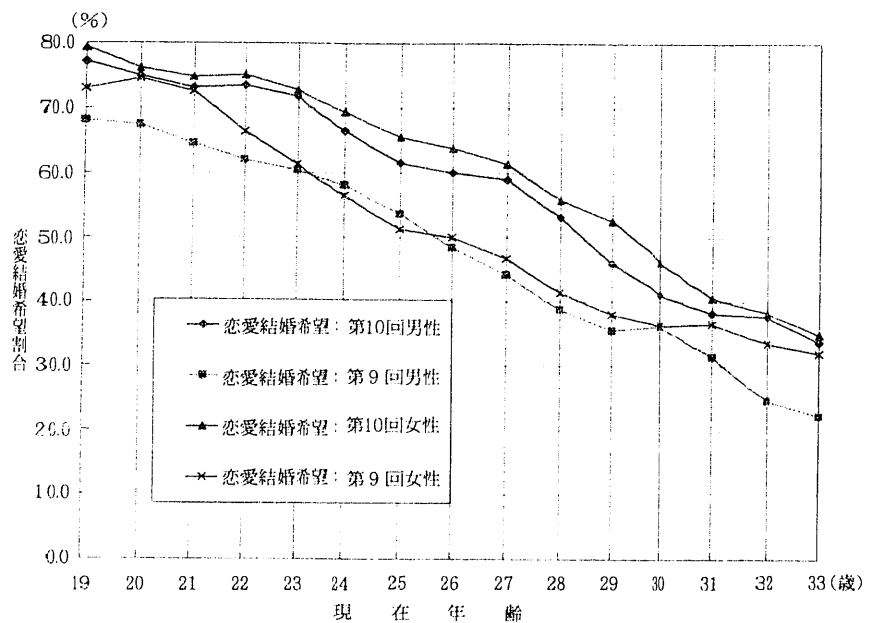
こうした処理をほどこした指標によって、まず社会経済的属性別に恋愛結婚希望割合をみると(表1)、居住地別では人口集中地区(DID)で、学歴別では「短大・高専」以上で「恋愛結婚」希望が多く、逆に非人口集中地区(Non-DID)や学歴「中学」などでは「恋愛結婚」希望が減少する。

職業・就業状態別では、男女ともホワイトカラー層の「恋愛結婚」希望が多く、ブルーカラー、「自営・家従」層では少なくなる。ホワイトカラーの中では、女性の「販売事務」職における「恋愛結婚」希望が多い。また、親との同居の関係では、別居の方が若干「恋愛結婚」希望が多くなる。

さらに、恋愛結婚志向は恋愛結婚が成立するための相手の有無によってかなり差があると考えられる。そこで結婚を考える相手との交際の段階別に「恋愛結婚」希望割合を見てみたい。

交際相手の段階には、「同棲中」、「婚約中」や現に「恋人あり」など、結婚を考慮し得る異性の相手がいる場合と、「異性友人あり」などのように結婚にはまだ結びつかない場合、友人を含めまったく

図1 未婚者の現在年齢別、恋愛結婚希望割合：第9回・第10回調査



注：3年齢の移動平均。

2) 標準化の年齢区分は、標準化して比較するカテゴリーである恋愛結婚希望割合および希望結婚年齢の年齢別パターンから判断して、各年齢グループ内ではカテゴリーに対して等質的とみられる区分であることが望ましい。本稿では各カテゴリーの年齢パターンとともに、各年齢グループを男女別に次のように位置づけ、「結婚」を基準にした人生段階の意味は男女で異なるが、各年齢グループ内では等質と考えられる区分設定を行った。すなわち、18~22歳(男女とも巣立ち期)、23~24歳(女性：結婚を意識する時期、男性：就業見習い期)、25~26歳(女性：結婚最盛期、男性：結婚を意識する時期)、27~29歳(女性：恋愛志向減退期、男性：結婚最盛期)、30~34歳(女性：結婚・非婚選択期、男性：恋愛志向減退期)。

標準化していない生のデータによる希望結婚形態別割合の数値については、厚生省人口問題研究所、『平成4年 第10回出生動向基本調査(結婚と出産に関する全国調査) 第II報告書 独身青年層の結婚観と子供観』前掲(注1)、pp.66-68を参照されたい。この標準化処理の結果、標準化済みの「恋愛結婚」希望割合は、対象未婚者の多数を占めるが結婚するにはまだ差し迫っていない23歳未満の若者の意識を軽く、結婚が現実の問題としてある程度認識されている23歳以上の未婚者の意識を重く評価する指標となっている。

表1 社会経済的属性別、恋愛結婚希望割合〔年齢標準化済〕

(%)

社会経済的屬性	恋愛結婚希望割合		社会経済的屬性	恋愛結婚希望割合	
	男性	女性		男性	女性
居住地			職業・就業状態		
総数	59.1	61.7	自営・家従	55.7	52.7
DID	60.9	63.1	ホワイトカラー	61.5	63.3
Non-DID	55.1	58.2	専門職	61.3	58.2
学歴			販売事務	61.0	65.3
中学	49.6	55.8	ブルーカラー	55.2	53.3
高校	53.3	63.5	結婚可能相手の段階		
短大・高専	62.1	61.0	同棲中	66.5	68.3
大学	61.1	60.0	婚約者あり	75.1	68.3
親との同・別居			恋人あり	77.2	76.7
親と同居	56.9	60.5	異性の友人あり	63.7	62.0
親と別居	63.5	64.6	異性の交際相手	52.5	50.5
			全くなし		

注：「いずれ結婚する」と答えた35歳未満の未婚者のみ。

年齢標準化処理は以下に掲げる年齢区分の恋愛結婚希望割合を平均したものである。

18-22歳, 23-24歳, 25-26歳, 27-29歳, 30-34歳。

短大・高専は専修学校を含む。

「交際異性なし」の場合など様々な段階がある。この交際相手の有無とその段階別に「恋愛結婚」希望の割合をみると、相手のいる場合には恋愛結婚希望割合が多く、そうでない場合には少なくなる。相手のいる場合では、「恋人あり」でもっとも「恋愛結婚」希望が多くなるのは、現に恋愛中であることから当然といえよう。他方、「交際異性なし」の場合には、男女とも「恋愛結婚」希望がもっとも少なくなり、逆に「恋愛にこだわらない」が多くなる。

以上に検討してきたところから、恋愛結婚志向は未婚者の現在年齢に強く規定され、さらに結婚に近いと思われる異性のいる男女で一段と高まることが明かである。この傾向が未婚男女に共通しており、社会経済的屬性による違いがそれほど大きくないことも指摘できることから、恋愛結婚志向の普遍化と高まり（恋愛結婚化）は社会制度的結婚から個人主義的結婚（結婚の個人化）への変化を表すものといえることができる。

2. 希望する結婚年齢と希望する相手の年齢

次に、未婚男女が結婚に対する社会的規範をどう受けとめているかを検討しよう。ここで用いる指標は、「何歳のときに何歳くらいの相手と結婚したいか」という設問によって得られた自身と相手の希望結婚年齢である。これによって結婚に対する年齢規範の強さをみることができる。

図2は未婚女子が希望する結婚年齢と相手の年齢を示したものである。

20歳頃の女性は平均25歳前後の結婚を望み、満23～24歳では26歳代の結婚を、25歳を過ぎるとほぼ2年後の年齢での結婚をとというように次第に将来の自分の年齢に近づけながら、満30歳では約1年半後の結婚を希望している。女性の望む相手との年齢差は平均2～3歳で比較的安定しているが、30歳を超えるとやや年齢差の少ない相手を希望する傾向がみられる。つまり女性の場合は、自身が希望する年齢と相手の年齢とがほぼ平行して上昇する形で年上の男性を希望している。この傾向は第9回調査と全く変わらず、男性年上婚の規範は強固であるといえることができる。しかし、この5年間で希望する結婚年齢は自身についても相手についても上昇していて、意識のうえでも晩婚化が進んでいるといえることができる。

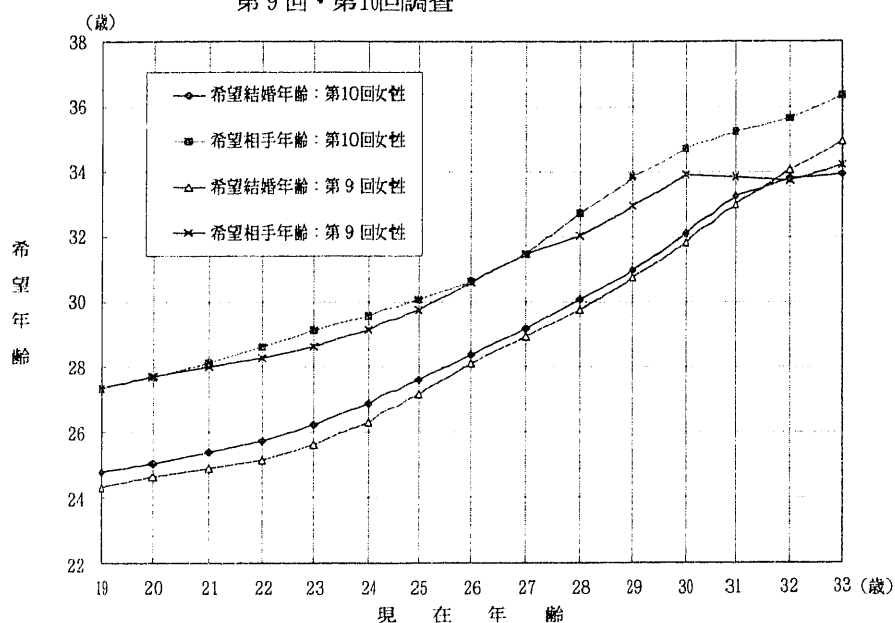
一方男性については（図3）、20歳前後に平均27歳前後の結婚を、23～24歳では28歳代、25～26歳では29歳代での結婚を望み、27～28歳を超えると30歳代での結婚を覚悟するようになる。相手との年齢差は、25歳頃までの男性では平均2～3歳であるが、それ以降は自分の年齢が上昇しても相手には25～26歳を中心とする「適齢期」女性を望むため、男性の年齢上昇とともに希望相手との年齢差は明らかに大きくなる。前回調査との比較から、男性の希望結婚年齢にも晩婚化の進行が認められる。

総じて、希望の結婚年齢は現在年齢の影響を強く受け、自分自身の結婚年齢については男女とも25歳を超えるとほぼ現在年齢から一定年数を経た年齢での結婚を望んでいて、意識の上では晩婚化が進んでいる。さらに、興味深いのは、相手に対する希望年齢が男女で大きく異なることで、女性では自分の希望結婚年齢より一定年齢上の男性を相手に希望するのに対し、男性は自分の希望年齢が30歳を超えてもいわゆる適齢期の女性を希望している。つまり女性の相手年上婚への

こだわりが強いのに対して、男性はいくつになっても女性の「適齢期」へのこだわりが強く、相手との年齢差ということからみれば、女性は相手の「相対年齢」を、男性は相手の「絶対年齢」を希望している。その意味では結婚の年齢組合せ規範は晩婚化が進行するなかにあっても強固に存続しているといえることができる。

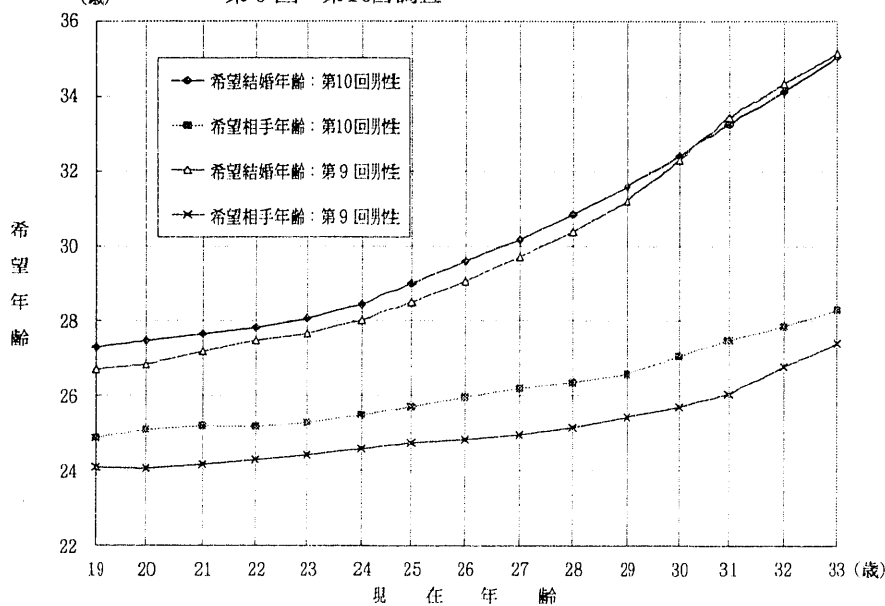
ついで、年齢構成を標準化した指標によって、いくつかの社会経済的属性と希望結婚年齢の関係を

図2 現在年齢別、女性の平均希望結婚年齢と平均希望相手年齢
第9回・第10回調査



注：3年間の移動平均。

図3 現在年齢別、男性の平均希望結婚年齢と平均希望相手年齢
第9回・第10回調査



注：3年間の移動平均。

みよう。大まかな特徴を述べると、自身の希望結婚年齢および希望する相手年齢は男女ともに人口集中地区（DID）の方が非人口集中地区（Non-DID）よりやや高いが、その差は小さい。学歴水準と希望結婚年齢は、標準化していないデータでは、一般に高学歴ほど晩婚を志向しているが、年齢構成を標準化してみると、男性ではほとんど学歴による違いはないのに対して、女性では高学歴ほど晩婚化の傾向がみられ、相手との年齢差はもっとも小さい。また、職業・就業状態別には、男女ともにブルーカラーが相対的にやや早婚希望で、かつ相手との年齢差が小さいという傾向が認められる。

そうはいうものの、女性の相手年上の「上方婚」志向、男性の相手年下の「下方婚」、とくに「適齢期」女性志向は社会経済的属性別にみても明かに一貫しており、この傾向は高学歴においても基本的な違いはない。また、晩婚化という視点からは、大都市地域、高学歴女性、「自営・家従」層などでさらに晩婚化が進む可能性を指摘することができる。

3. 結婚相手の条件

次に結婚相手に求める条件として未婚男女が評価する項目とその度合いを検討する。第10回調査で設定された項目は、学歴、職業、経済力、人柄、容姿、続き柄の6つであり、それぞれについて、どの程度の比重で考慮を払うかを質問した。

結婚相手の条件として、男女がいずれも大きな関心を示す相手の属性条件は「人柄」であり、男性では80%、女性で89%が「重視する」と答えている（表2）。

問題は、「人柄」以外の項目に対する男女の関心の大きな相違である。男性では、第2に重視する割合が多いのは「容姿」の22%、「続き柄」の10%で、それ以外の項目はほとんど評価されていない。これに対して女性が重視する項目は、「人柄」に次いで「経済力」「職業」などの総合的な稼得能力である。

ここで、結婚相手に対する条件への関心度合いを「重視する」だけでなく「考慮する」範囲まで広げて観察してみよう。男女ともに圧倒的に評価されている「人柄」を除くと、相手の属性条件を「重視+考慮」として答えた割合が半数を超えるのは、男性では相手の「容姿」に対してだけであり、他には「続き柄」に対する44%、「職業」に対する40%の関心が主要なものである。これに対して女性では、相手の「経済力」に対する89%を筆頭にすべての項目について強い関心を示している。なかで

表2 結婚相手の条件項目別、考慮・重視する未婚者の割合

(%)

結婚相手としての考慮項目	重視する	考慮する	重視+考慮	あまり関係ない	不詳
男 性					
学 歴	2.8	27.0	29.8	67.2	3.0
職 業	4.4	35.1	39.5	57.4	3.2
経 済 力	3.4	23.3	26.7	69.8	3.5
人 柄	79.6	14.5	94.1	3.4	2.5
容 姿	22.2	57.4	79.6	16.9	3.4
続 き 柄	10.2	34.0	44.2	52.7	3.1
女 性					
学 歴	9.0	45.6	54.6	43.4	2.0
職 業	22.5	55.5	78.0	20.0	2.0
経 済 力	33.6	55.1	88.7	9.2	2.2
人 柄	89.3	8.0	97.3	1.0	1.7
容 姿	12.9	54.8	67.7	30.2	2.1
続 き 柄	16.4	45.9	62.3	35.7	2.0

注：「いずれ結婚する」と答えた35歳未満の未婚者のみ。

も、男性の「経済力」や「職業」といった稼働能力や社会的地位に関する項目への関心が非常に強いことが注目される。また相手男性の続柄に対する関心も大きい。

つぎに、本人の学歴別に相手条件への「重視+考慮」の関心程度をみると、高学歴ほど条件への関心が強い。すなわち、男性では「容姿」を中心とした相手女性の条件への関心が高学歴層ほど強く(図4)、女性では「経済力」「職業」を中心とした相手男性への条件を強く要求している(図5)。また男女ともにホワイトカラーが他の職業におけるより相手に対する要求がより高い³⁾。

このように、男性は、女性の「容姿」に強いこだわりをもつ反面、それ以外の項目をそれほど評価していないが、女性は男性にすべての項目に対して高い条件を突きつけていて、結婚相手に求める条件が大きく食い違っていることが明かであり、結婚相手の条件にもジェンダー・ロールが強く反映している。

III 未婚女性のライフコース観

1. 未婚女性の理想と予定のライフコース

未婚女性の結婚志向は、自らのライフコースに対する考え方から

も裏付けられる。ライフコースに対する考え方は将来の生活設計ともいべきものであるから、理想とする考え方と、理想は理想として、現実には必ずしも理想通りにはいかないという見通しとがある。そこで独身者調査では、未婚女性のライフコースを理想とするコースと現実になりそうなコース(予定するライフコース)との両面から調べている。

理想のライフコースとして結婚しないコースや結婚しても子どもを生まないコースを意図するもの

3) 厚生省人口問題研究所、『平成4年 第10回出生動向基本調査(結婚と出産に関する全国調査) 第II報告書 独身青年層の結婚観と子供観』、前掲(注1) pp.69-77を参照。

図4 結婚相手の条件別、重視+考慮すると答えた割合
未婚男性の学歴別

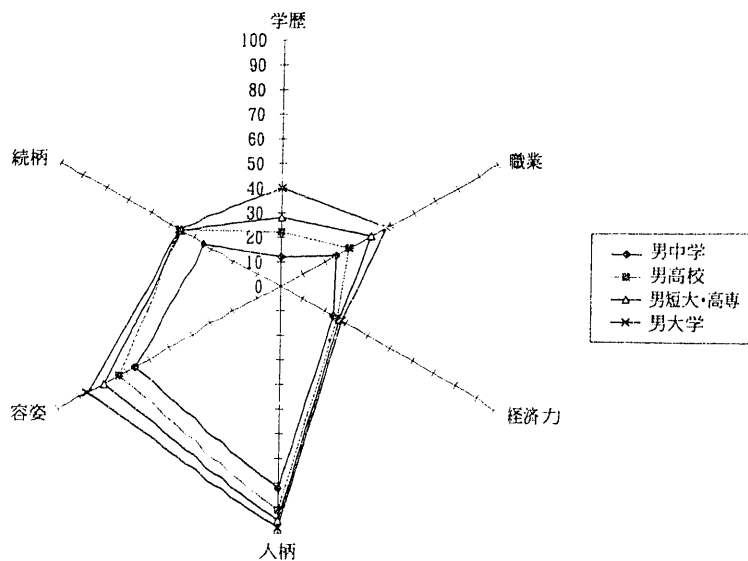


図5 結婚相手の条件別、重視+考慮すると答えた割合
未婚女性の学歴別

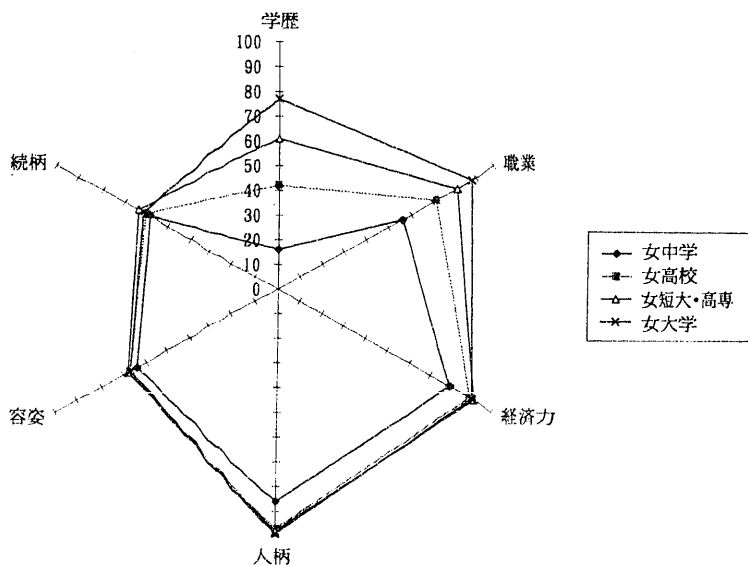


表3 未婚女性の理想と予定のライフコース

(%)

年齢階級	総数	非婚就業継続コース	DINKSコース	両立コース	再就職コース	専業主婦コース	その他不詳
理想のライフコース							
18～34歳	100.0	3.3	4.1	19.3	29.7	32.5	11.1
18～19	100.0	4.0	4.8	18.3	31.0	32.5	9.5
20～24	100.0	3.1	3.1	18.4	30.1	34.7	10.5
25～29	100.0	2.8	5.3	21.7	28.1	29.6	12.4
30～34	100.0	3.6	6.1	21.9	27.1	24.7	16.6
予定するライフコース							
18～34歳	100.0	9.5	2.6	14.7	45.8	19.2	8.2
18～19	100.0	7.5	2.6	13.4	46.1	22.9	7.4
20～24	100.0	6.7	1.8	15.3	50.5	18.8	6.8
25～29	100.0	11.2	2.8	16.2	42.1	16.5	11.1
30～34	100.0	31.2	8.1	10.9	21.5	16.2	12.1

注：いずれ結婚するつもりでの未婚女性について

は7%程度に過ぎず、大部分の未婚女子は結婚し子どもを生むコースを理想としている。そのうえで、出産と就業との組合せをどう選択するかによって理想のコースが枝分かれする(表3)。

理想のコースは1位が専業主婦コース、2位が再就職コースで、この2つのコースで62%をしめ、未婚女性が少なくとも出産・子育て期は家庭にあることを理想としていることがわかる。この理想のライフコースの分布は第9回調査とほとんど変わっていない。

ところが実際になりそうな予定のコースでは、専業主婦コースが大幅に後退し、半数近くが再就職コースを予想している。これも第9回調査とほとんど変わらない傾向であるところから、未婚女性の再就職コース選択の意図～出産・子育て期の家庭専従～はかなり安定しているとみることができよう。ちなみに、夫婦調査における妻の実際にたどったライフコースをみると、結婚当初の専業主婦コースから子育て後期の再就職コースへと、結婚後のライフステージの変化によって就業行動が選択されていて、その意味では、未婚女性が予定するライフコースは多くの妻が実際にたどってきたコースを基本的に追認するものといえることができる。

しかし、30歳を超えて未婚にとどまると、再就職コースが一挙に減少して非婚就業継続コースが増加し、結婚志向そのものが危くなる傾向がみられる。また、年齢が高くなるのにもなって不詳が増加するが、このことは、結婚の意思がありながら未婚状態が長く続くと、自らの結婚やライフコースに確たるイメージを描きにくくなることを反映するものといえよう。

2. 結婚規範からみた理想と予定のライフコース

前回調査と同じように、今回調査でも結婚の意思をもつ未婚者の結婚に対する態度を従来からの規範にこだわるか否かという観点から、「年齢志向」と「相手志向」という2つの指標によって調べている。この「年齢志向」(ある程度の年齢までには結婚するつもり)は「適齢期」にこだわる結婚態度であり、「相手志向」(理想的な相手が見つかるまでは結婚しなくてもかまわない)は女性の結婚年齢に対する社会的な規範にとらわれない態度を表す指標である。この2つの指標は結婚に対する需要の質を測る指標として設けられたものである⁴⁾。そこでこの結婚に対する年齢規範によってライフコー

4) 金子隆一、前掲(注1)、「未婚人口における結婚の需給要因の動向―第10回出生動向基本調査(独身者調査)の結果から―」, pp.4-6.

表4 「年齢志向」と「相手志向」をもつ未婚女性の理想と予定のライフコース

(%)

年齢階級	非婚就業継続コース		DINKSコース		両立コース		再就職コース		専業主婦コース	
	年齢志向	相手志向	年齢志向	相手志向	年齢志向	相手志向	年齢志向	相手志向	年齢志向	相手志向
理想とするライフコース										
18～34歳	1.2	2.7	1.9	6.2	17.9	23.9	34.2	29.9	37.8	28.9
20～24	1.4	3.5	1.8	4.8	16.9	23.2	33.9	30.8	39.7	29.3
25～29	0.5	1.6	2.5	8.2	24.5	25.3	27.9	28.2	35.3	27.8
30～34	0.0	1.4	2.6	6.5	15.4	25.4	30.8	30.4	28.2	26.8
予定するライフコース										
18～34歳	3.5	11.5	1.2	4.0	15.6	15.7	53.7	43.6	21.7	18.7
20～24	3.3	7.5	1.2	2.6	16.1	16.3	57.4	48.9	19.2	19.3
25～29	5.4	15.5	1.5	3.5	16.2	18.7	52.9	37.0	17.2	17.1
30～34	7.7	31.9	5.1	12.3	12.8	10.1	28.2	22.5	23.1	15.2

注：いずれ結婚するつもりで未婚女性について

「年齢志向」：ある程度の年齢までには結婚する

「相手志向」：理想的な相手が見つかるまでは結婚しない

スに対する考え方に違いがあるかどうかをみておきたい（表4）。

まず理想のコースでは、その6割強をしめる専業主婦コース・再就職コース志向は、いずれも「相手志向」より「年齢志向」の女性の方が強い。この両コースでは、「相手志向」は年齢によってほとんど変化しないのに対して、「年齢志向」は現在年齢による変化が大きく、年齢が若いほど専業主婦コース・再就職コースを理想とするものが多い。とくに専業主婦コース志向にその傾向が明かである。このことは、若い年齢層の女性にまだ結婚や結婚後の具体的な生活のイメージが確かなものになっていないことをうかがわせる。これとは対照的に、両立コースでは「相手志向」が優勢で、しかも「相手志向」には年齢による変化がほとんどない。いずれのコースを理想とするにしろ、現在の年齢によって選択の違いが大きいのは「年齢志向」の女性であって、その意味で「年齢志向」の理想のライフコース観が不安定であるということもできよう。

予定のコースは先述したように再就職コースへ集中しているが、再就職コース志向は「年齢志向」で強く、理想の専業主婦コースが予定のコースとしては一挙に少なくなるころから、適齢期規範をもつものが再就職コースを予定する傾向が強いとみることができる。しかし、このコースでは、結婚規範の違いとともに、女性の年齢がコース選択に大きな影響をもっており、「年齢志向」であれ「相手志向」であれ、30歳を過ぎると再就職コースは一挙に減少する。つまり、再就職コースを予定していても、未婚の状態が長く続くと、結婚し子どもを生むことの実現性が不確実になると意識されることをうかがわせる。このことは、30～34歳の非婚就業継続コースがとくに「相手志向」において一挙に高まることから予想されよう。

3. 交際相手の有無とライフコース

結婚が成立するための重要な供給要因に交際相手がいるかどうかがある。恋愛結婚を志向する傾向が強まるなかで、しかし、交際相手を持たないものがかかなり存在しており、しかもこの傾向は前回調査とあまり変わっていない。そこでまず交際相手の有無からライフコースの見通しをみると、「交際相手あり」の半数が再就職コースを予定し、あとの半数は両立コース・専業主婦コースに分散する。しかし「交際相手なし」では再就職コースを予定するものが減って非婚就業継続コースが相対的に増えている。このことは、交際相手がいれば結婚の実現性が高い（結婚への距離が近い）と再就職コースが現実的なコースとして選択される傾向が強いのに対して、交際相手がない（結婚への距離が遠い）

表5 交際相手の段階別予定するライフコース：交際相手のいる未婚女性について

(%)

年齢階級 交際相手の段階	総数	非婚就業 継続コース	DINKS コース	両立コース	再就職 コース	専業主婦 コース	その他 不詳
18～34歳							
友人	100.0 (537)	10.2	3.4	17.7	45.4	17.7	5.6
恋人	100.0 (929)	5.6	2.9	16.3	53.9	17.8	3.6
婚約者	100.0 (135)	—	—	19.3	54.1	21.5	5.2
20～24歳							
友人	100.0 (360)	7.8	2.5	18.1	48.3	17.8	5.6
恋人	100.0 (668)	3.0	1.5	16.6	58.5	18.0	2.4
婚約者	100.0 (65)	—	—	12.3	61.5	23.1	3.1
25～29歳							
友人	100.0 (133)	12.8	3.0	19.5	42.9	16.5	5.3
恋人	100.0 (215)	9.3	3.3	17.2	45.1	19.1	6.0
婚約者	100.0 (62)	—	—	25.8	50.0	17.7	6.5
30～34歳							
友人	100.0 (44)	22.7	11.4	9.1	29.5	20.5	6.8
恋人	100.0 (46)	26.1	21.7	6.5	28.3	8.7	8.7

注：いずれ結婚するつもりで未婚女性について

18～34歳未婚女性のうち交際相手ありは63.9%

30～34歳の婚約者ありの標本数は8

と結婚の実現性そのものが不確かであるために、ライフコースの見通しもまた不透明になり、場合によっては非婚就業継続コースを予定するものが増えることを示していると考えられる。

そこで、交際相手のあるものについて、その親密さの程度を結婚への距離の遠近から友人・恋人・婚約者に段階区分し、親密さの程度と予定するライフコースとの関連をみておきたい(表5)。

未婚女性全体でみると、親密さが高まる程再就職コースが増えていて、再就職コースが結婚を前提とした現実的なコースとして意識されているとみることができる。両立コースや専業主婦コースは交際相手の段階による違いはほとんどない。結婚が具体化することがほとんど確実な女性では、非婚就業継続コースもDINKSコースも全く意図されていないことから、結婚への距離が近づくほど再就職コースが現実性を増し、反対に結婚への距離が遠いほど非婚就業継続コースに傾くということができよう。この傾向は20代女性により明らかで、特に20～24歳では結婚への近さと再就職コース志向との関連がもっとも強く、比較的早い年齢で結婚を予定するものが再就職コースを予定する可能性が高い。この傾向は25～29歳でやや弱まるものの、本質的な違いはない。

ところが30～34歳になると様相が一変する。この年齢層で婚約者のあるものはごく少数なので、友人と恋人の段階とで比較すると、そのいずれの段階においても20代にみられるような再就職コースへの集中がなくなり、再就職コース・非婚就業継続コース・専業主婦コースとに3分されて、交際相手の親密さと予定するライフコースとの関連が薄れている。とくに、20代でほとんどみられなかった非婚就業継続コースやDINKSコースが出現することは、交際相手があっても、結婚しないコースや結婚しても子どもを生まないコースを意識するものが増えるという点で注目される。

4. 理想のライフコースと予定するライフコースとの関連

未婚女性のライフコースに対する考え方に理想と予定の違いが大きいところから、理想とするライフコースと予定するライフコースとの関連について見ておきたい。

理想のライフコースと予定のコースとをクロスし両者が一致するコースをみると、一致する割合が

もっとも高いのは再就職コース（一致度41％）で、逆にもっとも低いのが専業主婦コース（一致度17％）である。このことから、再就職コースが実現性の高いコースであると予想されるが、反対に専業主婦コースは未婚女性にとって理想のコースではあってもあまり実現性はないと考えられていることがわかる。また他のコースも理想と予定の一致度はそれほど高くはない。このことは、未婚女性が現実になりそうだと考えているライフコースが理想とはかなり大きく隔たっていることを示すもので、ことばを換えれば、未婚女性のライフコースが自分自身にとって非常に不透明であることを示すものであるともいうことができよう。ちなみに、DINKSコース・非婚就業継続コースの一致度は27～28％で、これらのコースがはじめから意図して選択しようとするコースだとはいい難いことを示すものであろう。

そこで現実になりそうな予定のコースが理想とするコースのどの部分からどの程度供給されているかをみてみよう。それによって、未婚女性の理想と予定の乖離の大きさが明らかになるものと思われる。

図6にみられるように、予定するライフコースは、どのコースでも、さまざまな理想のコースから供給されていることが明かである。再就職コースを例にとると、予定の再就職コースは、もともと再就職コースを理想とするものよりも、専業主婦コースを理想としたものから供給される方がずっと多く、また、理想の両立コースからも供給さ

れていて、予定の再就職コースが理想の再就職コースよりもそれ以外のコースから供給されるほうが多いことがわかる。このことは、メインのコースである再就職コースでも理想と現実のギャップが大きいことを示している。

予定のライフコースがそれ自体を理想とするもの以外から多くを供給されるという傾向は、他のライフコースにおいても同じであるが、とくに再就職コースと専業主婦コースとでお互いを給源とすることが多い。これら両コースの違いは出産・子育て期の家庭専従をその後も続けるかどうかの選択の違いであり、その意味では、未婚女性にとってライフコースの違いというよりは生活のステージに応じてどちらにもなりうる状況の変化を意味するに過ぎないともいうことができる。それ故にこれら両コースで予定のコースの給源が相互に依存する程度が大きいのではないかと考えられる。

ところが予定の非婚就業継続コースでは、このコースを理想とするものはその1割にもみならず、他のコース（結婚し出産するコース）を理想とするものから万遍なく供給されている。このことは、非婚が意図されるコースであるというよりは、結果としてそうなるという意味あいの強いコースであることを意味するものだといえるのではないだろうか。

5. 未婚男性が女性に期待するライフコース

ところで、未婚男性は結婚相手である女性にどんなライフコースを期待しているのだろうか（表6）。

未婚男性は女性に対して非婚就業継続コースやDINKSコースを全く望んでいない。また、両立コースを期待するものも1割に過ぎず、未婚男性の3/4は再就職コース・専業主婦コースのいずれかの

図6 予定のライフコースと理想のライフコースとの関連
35歳未満女性

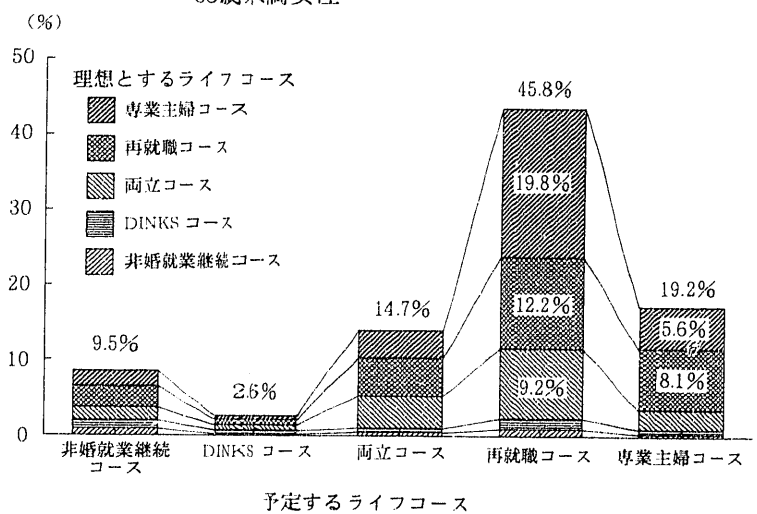


表6 婚約者・恋人のいる男性が女性に期待するライフコース

年齢階級	総数	非婚就業 継続コース	DINKS コース	両立コース	再就職 コース	専業主婦 コース	その他 不詳
第10回調査							
18-34歳	100.0	0.2	0.9	8.9	49.4	33.0	7.6
20-24	100.0	0.4	0.6	8.7	48.0	35.2	7.2
25-29	100.0	—	1.2	10.1	56.1	25.6	7.0
30-34	100.0	—	1.1	5.6	42.7	37.1	13.5
第9回調査							
18-34歳	100.0	—	0.6	10.5	43.6	39.2	6.1

注：いずれ結婚するつもり未婚男性について

形で女性に出産・子育て期の家庭専従を求めている。とくに、結婚への距離が近い（婚約者や恋人あり）男性が期待するライフコースはこの2つに集約されており、しかもこの傾向は第9回調査とほとんど変わっていない。しかし第9回調査と比べて、専業主婦コースが減少して再就職コースがやや増加していることから、女性に家庭専従を求めるのは出産・子育て期だけで、子育て後には再就職を期待する傾向が強まったとみることができよう。

この男性が女性に期待するライフコースと女性が予定するライフコースとを比べてみるとかなりの隔たりが認められる。そのなかでは再就職コースが比較的良好一致していて、このことから再就職コースの実現性が高いであろうと予測されるが、その他のコースでは男女の考え方の違いが大きい。とくに、非婚就業継続コースの違いが際だっており、どの年齢の男性も女性に非婚を全く望んでいないのに対して、女子で非婚就業継続コースを予定する者はそれよりずっと多く、とくに25歳以上で大きな違いが生じている。

このライフコースに対する男女の考え方の違いは、結婚するしないをも含めて将来の生活設計に対する考え方の違いであり、これが結婚の需要と供給に及ぼす影響が懸念される。

IV 結婚後の親子同居に関する意識

1. 自分の親との同居意思⁵⁾

自分の親と「同居する」意思を持つ男性は65%で、年齢が高いほど同居意思が強まる。男子の同居志向は第8回調査から第9回調査にかけて弱まったが、第10回調査でやや持ち直した感がある。しかし結婚直後から同居するつもりのもは2割程度に過ぎず、同居志向の2/3が結婚後ある程度時間が経過した時点での同居を考えている。とくに第9回調査と比べると、結婚直後からの同居が減り、「親が年をとったら」という晩年型同居が増加していて、意識としての同居志向は強いとはいえない。必ずしも一貫同居（結婚直後から同居を続ける）を志向しているわけではない。同居はしないとすることは第9回調査とほとんど変わっていないことから、途中同居志向、それも親晩年型同居志向が強くなっているといえよう。しかし、30歳を超えると同居志向が強くなるが、その時期は「結婚直後」・「しばらくしたら」・「晩年型」とにほぼ3分され、20代と30代とで親との同居に関する意識の違いが生じている。

女性の場合は自分の親との同居志向は男性に比べてかなり低く、はっきり同居しないとすることも半数近い。自分の親との同居を考えるものも、その時期は親の晩年である。第9回調査と比べると自

5) 厚生省人口問題研究所、『平成4年 第10回出生動向基本調査（結婚と出産に関する全国調査）第Ⅱ報告書 独身青年層の結婚観と子供観』、前掲（注1）p.83を参照。

分の親との同居志向は若干強まっているが、女性が自分の親と同居するのはほとんどが親の晩年と意識されている。その意味で、女性が自分の親と同居することは、かなり漠然とした意識だとみることでもできよう。

2. 未婚男性の属性からみた自分の親との同居意思

女性に比べて同居志向の強い男性について、「一貫同居」志向を社会経済的属性別に検討したい。

教育水準と一貫同居意思は逆比例する傾向が認められるものの、しかしどの学歴においても一貫同居志向はそれほど高くはない。職業別には、自営業の一貫同居志向が非常に強いのが目だっているが、それ以外の職業では弱く、職業の違いによる差もほとんどない（表7）。

表7 属性別にみた「結婚直後から自分の親と同居する」と答えた未婚男性の割合

社会経済的属性	第10回調査	第9回調査	社会経済的属性	第10回調査	第9回調査
(1) 学歴			(3) 現住地		
中学校	21.1%	22.7	非人口集中地区	22.8%	35.2
男女共学の高校	17.5	27.4	人口集中地区	10.9	
男女別学の高校	17.8	23.6	200万未満	11.3	15.7
専修学校（高卒後）	15.5	22.4	200万以上	9.5	11.8
短大・高専	16.9	31.5	(4) 地域ブロック		
大学以上	11.6	15.6	北海道	7.3%	9.4
(2) 職業			東北	21.6	32.9
主として農林漁業	52.4%	46.4	関東	11.5	20.4
農林漁業以外の自家営業	25.2		中部	17.5	28.1
勤め人			近畿	15.6	18.8
専門職・管理職	14.8	21.8	中国・四国	16.3	20.0
事務・販売・サービス	16.4	21.3	九州・沖縄	15.2	17.2
工場などの現場労働	16.9	25.8	(5) 続柄		
パート・臨時雇い	12.7	20.3	一人っ子	20.1%	28.5
無職・家事	17.4	14.1	長男	15.4	
学生	10.4	12.9			

注：いずれ結婚するつもり未婚男性について

現住地別には非人口集中地区の一貫同居志向が強いが、人口集中地区では人口規模にかかわらず、一貫同居志向はいずれも弱い。この一貫同居志向の地域差は地域ブロック別にも同様である。

続柄別には、長男は長男以外の男子より僅かに一貫同居志向が強いが、長男を一人っ子長男と一人っ子以外の長男とに分けてみると、一人っ子長男の方がやや一貫同居志向が強い。しかしその違いはそれほど大きくはない。ちなみに、一人っ子長男の自分の親との同居時期は、結婚直後・しばらくしたら・親の老後にほぼ3分されるのに対して、一人っ子以外の長男は親の老後を強く意識していて、長男といっても、男きょうだいの有無によって自分の親との同居別居に対する意識がかなり違うといえる。

未婚男性の一貫同居志向は女性より強いとはいうものの、この5年の間にほとんどの属性で弱まってきており、自分の親との同居別居は、親の加齢の過程で、地域性や家業とのからみで選択されることを示唆している。

3. 未婚女性の属性からみた相手の親との同居意識

では未婚女性は相手の親との同居をどう考えているのだろうか。

女性の場合は、自分の親との同居よりは相手の親と同居する意識が強いが、その場合でも晩年型同

居志向が強い。逆に「同居はしない」というものも1/3はいるところから、相手の親との晩年型同居と「同居はしない」というものを属性別にみておきたい（表8）。

相手の親の老後に同居するとするものは、高学歴、専門・管理職、人口集中地区などで若干多いが、しかし属性による違いは小さい。続き柄別にも同じである。しかし、男きょうだいのいない女性で同居しないとするものが多く、一人っ子長女の45%、女きょうだいの長女の41%が相手の親と同居しないと答えている。男性では長男の同居志向が強いから、親との同居志向に対するきょうだいの有無と続き柄による男女の意識の違いが、配偶者選択にどんな影響を及ぼすかが注目される。

最後に未婚女性が予定するライフコースからみた相手の親との同居志向にふれておきたい⁶⁾。

DINKSコースの同居志向が弱いのを除けば、それ以外のコースで6割前後が同居すると答えている。非婚就業継続コースを予定している女性でも半数が同居志向をもっており、ここでも非婚の選択が意図的なものでないことが示されている。

子どもを生むことを予定する両立コース・再就職コース・専業主婦コースでは、同居志向が強いとはいっても、いずれも一貫同居志向は弱く、同居の時期は親の老後に傾いていて、相手の親との同居を結婚後の就業継続や子育て支援の戦力とは受けとめていないようである。この傾向は自分の親との同居に対する考え方にも同じように現れていて、未婚女性にとって、親との同居は、相手の親であれ、自分の親であれ、また、ライフコースのいかんにかかわらず、なるべく先へ延ばしたいものようである。

このようにみると、未婚女性にとって相手の親と同居することは、出産・子育て支援を直接的に期待するというよりは、親が年老いたときの扶養あるいは手助けという意味あいの強い、かなり漠然としたイメージでとらえているとみた方がいいのかもしれない。

表8 属性別にみた相手の親との同居意思：未婚女性

社会経済的屬性	親が年をとったら	同居はしない	社会経済的屬性	親が年をとったら	同居はしない
(1) 学歴			(3) 現住地		
中学校	21.4%	40.0	非人口集中地区	23.2%	31.2
男女共学の高校	24.0	36.9	人口集中地区	28.3	37.0
男女別学の高校	25.9	31.8	200万未満	28.3	36.8
専修学校（高卒後）	24.6	32.6	200万以上	28.5	37.3
短大・高専	31.3	35.3	(4) 地域ブロック		
大学以上	28.1	36.3	北海道	33.3%	39.4
(2) 職業			東北	21.0	35.0
自家営業（含農業）	21.6%	43.2	関東	26.4	36.7
勤め人			中部	24.7	30.4
専門職・管理職	32.1	26.9	近畿	30.8	34.6
事務・販売・サービス	27.0	35.7	中国・四国	26.5	34.2
工場などの現場労働	17.5	30.7	九州・沖縄	26.9	39.6
パート・臨時雇い	30.7	32.7	(5) 続柄		
無職・家事	23.1	40.6	一人っ子	26.1%	45.1
学生	24.9	39.5	女姉妹だけの長女	25.6	40.6
			その他の女子	27.1	33.1

注：いずれ結婚するつもり未婚女性について

6) 厚生省人口問題研究所、『平成4年 第10回出生動向基本調査（結婚と出産に関する全国調査）第II報告書 独身青年層の結婚観と子供観』、前掲（注1）p.86を参照。

結びにかえて

晩婚化が著しく進んでいるが、未婚男女の結婚志向そのものが目立って衰えたわけではないことは、ここまで述べてきたところからも明かである。しかし、結婚したいという男女それぞれの意思が必ずしもうまくマッチしないのではないかという危惧も感じられる。調査結果によると、とくに「結婚最盛期」というべき年齢層で恋愛結婚志向が強い。恋愛で配偶者を決めたいという意味は、若者が主体性をもって結婚を決断したいという意志の表れと解することができる。しかし、その恋愛結婚したいという意思を吟味すると、数々の矛盾が浮かび上がる。

たとえば、結婚年齢は依然として女性の「上方婚」、男性の「下方婚」をよしとしており、とくに男性は女性の「適齢期」に強いこだわりをもっている。この男女の年齢差へのこだわりは、お互いに配偶者選択の範囲をせばめることになりかねない。また、相手に求める条件も結婚の主体性を疑わせる。「人柄」第1はもっともであるが、それ以外の要求となると、男性は女性の「容姿」にこだわり、女性は男性に一家の大黒柱としての「生活能力」を求めている。このことは、結婚後の生活設計に対する考え方にも色濃く反映して、男性は女性に家事・子育て専従を希望し、女性もその要望にみごとに答えている。親との同居についても、ひとまずは結婚直後からの同居を忌避する傾向が強まっているが、これも子育て中は妻が家庭専従のライフコースを選択する意思と合致するものといえるかもしれない。このような考え方は高学歴男女においても基本的に例外ではない。

このようにみると、恋愛結婚志向は結婚に対する主体性の高まりという一面とともに、たぶん「ロマンチックラブ」へのあこがれという側面もあるといえるのではないだろうか。このことは、恋愛で相手を見つけるのが難しい状況になると、結果として恋愛志向が急速にしばむことにも表れている。恋愛結婚が成立するためにはまず現在年齢が大きな規定条件になる。だから、未婚の状態が長く続くと結婚志向そのものが危うくなり、その結果として非婚の選択がなされる可能性が生じる。

結婚の主体性を主張する若者が増加していることは、結婚の個人化が進んでいることを意味する。しかし、この調査結果から浮かび上がってくるのは、やや極端に言えば、若い男性の「保守性」と女性の「甘え」である。女性の社会参加が進み、男女共同参画型社会をめざすという方向のなかで、未婚男女の結婚の個人化志向というタテマエと、従来からの社会規範を脱しきれないホンネとが作用しあって、なかなか結婚に踏み切れない（できない？）結婚事情の一端を形作っているのではないだろうか。

The Views for Marriage among Unmarried Youths in Contemporary Japan

Eiko NAKANO and Yoshikazu WATANABE

The purpose of this paper is to describe the views for marriage among unmarried youths in contemporary Japan, using the unmarried respondents' part of the Tenth Japanese National Fertility Survey carried out on July 1992.

Major findings are as follows ;

(1) Concerning the desired marriage type, i.e., love match or not, which is the desirable for young unmarried respondents, two thirds of unmarried males and seven tenths of unmarried females prefer love match as the process of marriage formation. There are significant changes in level of

the preferences by ages of the unmarried. Younger the unmarried person, more prefer the love match. When the age goes over the modal age of marriage, now the unmarried do not prefer the love match as before.

(2) As the age of the unmarried rise, the desired age at marriage also goes up, but slower pace than the age of themselves. As for the desired age gap between spouses, whereas the unmarried male always desire young and marriage modal aged female as a spouse, the unmarried female tends to wish the two or three years senior spouse at any time.

(3) The greatest concern of Unmarried for the desirable properties of their future spouse is good personality, the same as for both sex respondents. The next major concerns of females are mainly economic power and status of the spouse such as earnings and occupation. The following concerns of females are so many as the good looking, the family relationship and the educational attainments of their future spouse. The next concern of male respondents, in contrast with those of females, is almost only the good looking of the spouse.

(4) Women's future life courses are classified into some categories by following criterions, getting married or not, having job and continuing her business in parallel with their marriage life or not, having children or not. The majority of unmarried females think the following two are the desirable life courses for women. The first is *sengyou-shufu* course (that of housewives or women marry and have children without any outside job). The second is *sai-shuushoku* course (that of women marry, once retire their outside job, bear and rear their children, then restart their outside job). The above two courses are based on three tenths of female respondents respectively. Concerning to their prospective estimations on their actual life courses, *sai-shuushoku* is in the ratio of almost half and *sengyou-shufu* is based on one fifth of female respondents. Half of male respondents hope for female choice of *sai-shuushoku*, and one third of male hope for those of *sengyou-shufu*.

(5) Two thirds of male respondents want to live their own parents after the marriage, and the two thirds of those want is not the coresidence of immediately after the marriage but somewhat later. Proportion of those want to live their parents immediately after the marriage is one fifth of male respondents. Postmarital coresidence with one's parents is more popular among the male respondents with the following characteristics : junior high-school graduate, agriculture engaged, self-management, and those family relationship of an only son or the eldest son. One third of female respondents want to avoid the coresidence with their future spouse's parents.